

Title	モロッコの石川三四郎とその後：地理的環境論への道
Sub Title	
Author	山口, 晃(Yamaguchi, Akira)
Publisher	慶應義塾福澤研究センター
Publication year	2000
Jtitle	近代日本研究 Vol.17, (2000. ) ,p.177- 223
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20000000-0177">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20000000-0177</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

研究ノート

# モロッコの石川三四郎とその後 ——地理的環境論への道——

山口 晃

石川三四郎（一八七六—一九五六）はポール・ルクリュ夫妻と共に一九一九年一一月二〇日にボルドーより船でアフリカに向かう。一二月四日カサブランカに着き、車でマラケシへ行き、ほぼ七箇月そこに滞在する。帰りはカサブランカから、ルクリュ夫人と共にイタリアの石炭船でジブラルタルへ渡り、スペインに上陸し、汽車を乗り継いでボルドー、そして再び中仏ドムへ戻っている。<sup>1</sup>しかし従来の石川三四郎研究においては、このモロッコ滞在が主題となることは皆無に近かつた。<sup>2</sup>

理由は二つほど考えられる。一つは、モロッコにおけるほぼ半年という短い期間は、七年半に及ぶ彼のヨーロッパ滞在の最後の一場面であり、流浪が特徴ともいえる石川の生涯の中では、糺余曲折のある放浪の場所の一つにすぎないと見られていたからであろう。そして石川自身もモロッコについては僅かな文章を書いただけであり、生地・山王堂、世田谷・千歳村、中国、中仏ドム、イングランド北部ミルソープのように重みを置いた形で言及し続けることがなかつた。二つ目の理由は、やや面倒な問題を含んでいる。周知のようにこのモロッコの時期は後の石川の二つの大きな仕事といえる『古事記神話の新研究』と、エリゼ・ルクリュ著『地人論』翻訳の出発点となっている。ところが、この二つの仕事が石川を考える際に大層扱いにくい著作といってよいのである。後にこの二つについては詳細に見ていただきたいが、まず著書としてこれらは評価しにくい。石川を専らアナキストとしてとらえるなら、この二つの仕事はやや逸脱あるいは道草であろう。

モロッコの石川を考える手掛かりは多くない。発表された文章としては、「勃興のマロック国」「摩絡可行」「摩國所見」、注(1)で触れた原稿「モロッコからフランスの古巣へ」、『古事記神話の新研究』「序」、それと「遺言の思ひ出」。他にモロッコからの石川の書簡が二通<sup>4</sup>。さらに補助資料としてモロッコ在住の石川宛書簡が数通ある。<sup>5</sup>今のところこれがすべてである。そして從来から次の一段落が重要視されてきた。少し長くなるが、或る意味でこの文章が、思想的には石川のモロッコのすべてを象徴していると考えられてきたのであるから、書き抜いておこう。

一九一九年十二月、私は旧友ボオル・ルクリュ氏と共に、同氏夫人マルグリト氏の病を療養する為に、三人にて佛國を出發し、モロッコ國の旧都マラケシ市（モロッコ市とも称せらる）に着いた。寄寓せし家は、ボ

オル氏令弟アンドレ・ルクリュ氏の宅であつた。宗教史の権威エリイ・ルクリュを父とし、地理学の泰斗エリゼ・ルクリュを叔父とするアンドレ氏は、やはりかうした種類の夥しい圖書を藏有していた。私はこの家に六ヶ月間滞在して、可なり多くの讀書の時間と、研究の便宜とを得た。忽然として私の注意がメソポタミヤに傾けられたのもこの時であつた。從来久しく抱懐したる古事記神話の疑問に對して、雷光の如き明光が投げられたのもこの時であつた。それから、私は隨分諸書を漁つて太古史を研究した。元よりこの短日時に纏まつた研究の出来やう筈はない。その内に私共はアフリカを出發することとなつた。如何に手を盡しても便船を得ることが出来ないので、遂に飛行機で大西洋、西班牙を横断して佛國に帰ることになつた。幾らそれが通常の交通機關になつたとて、これは私共の最初の試みである。多少の危険を感じずには居られなかつた。私の生命などは假令このまゝ大西洋の潮底に沈められても餘り惜しい品物では無い。併し、小さいながら一つの發見であると思はるゝこの古事記研究は、この儘に葬りたくはない、と私は考へた。そこで私は早々としてペンを執つて私の研究の結果を叙述した。そしてそれを巴里在住の一友人に送り、若し私に不幸があつたら、この研究を承継して呉れと言ひ添へてやつた。その時に送つた原稿が、即ち本書の過半を成して居る。

從來のモロッコからの帰還の説明は、大正一〇年刊『古事記神話の新研究』「序」のこの文脈で出てきたわけである。その後、石川はこの著書を繰り返し増補改訂し、最後の十二版は「昭和十六年に一旦組版まで出来上つたのであるが、當時の軍閥当局の忌むところとなつて、闇から闇に葬られ……」(二頁)、ようやく戦後、昭和二十五年に出版される。他方、エリゼ・ルクリュに関しては帰国後、ブリュッセルにあるエリゼ・ルクリュ地理学研

究所蔵書数万冊の購入交渉に石川は携わり、日本に運搬する（これについては後に触れる）。また昭和五年にはエリゼ・ルクリュ著『地人論』第一巻（春秋社刊）の翻訳を上梓し、さらに翌年はルクリュ研究会を主催する。<sup>6</sup>戦後も石川はルクリュへの関心は衰えず、昭和二三年には、世界的に見ても水準の高い『エリゼ・ルクリュ思想と生涯』（国民科学社）を著し、さらに『地人論』第二巻以降全巻の翻訳に着手する。七六歳の時である。結果的にはこの翻訳のための集中的な仕事が石川の命を縮める一因となる。その同じ年の夏に石川は倒れ、自ら二度と筆を執ることが出来なかつた。このようにモロッコの土と砂と青空という流浪の中で、そしてルクリュ夫人を見病しながらの読書・研究の中での、「雷光の如き明光」から彼は終生離れられなかつた。

モロッコは石川にとって、第一次世界大戦期間中数年間暮らした中仏ドムや、昭和二年以降終生生活と活動の場所であつた世田谷・千歳村のように土着した場ではなかつた。それは流浪の一つの空間であり、或る獨特な形で「場所の力」に引き寄せられた期間であつた。まず石川のモロッコについての印象を彼の思考の傾きと関連させながら眺め、次にモロッコを起点とする一つの著作と一つの翻訳のその後を考えてみたい。それは石川三四郎の「狭さ」、問題点と共に、或る可能性を考えることになるであろう。予め示唆的なかたちで述べるなら、問題点とは石川の実体的な叙述であり、可能性とは時系列とは別の視点からの、日本人の生活と学問への彼のアプローチである。

モロッコに係わつた日本の思想家は三人いる。第一次大戦直後の石川、十五年戦争中の山田吉彦（きだみのる）、そして戦後しばらくたつてからの四方田犬彦<sup>7</sup>。三人の思想家のモロッコ滞在が大雑把に二〇世紀の前半、中頃、末期としたとき、時の流れと、にもかかわらず三人がモロッコに引き寄せられていく光景は、人間が本来的に持つていてる流浪への抑えきれない促しの一面を示しているともいえよう。モロッコが見せる鮮やかな光と闇

の対照もその一因であつたかもしれない。しかし石川やきだみのるが滯在していた頃は、とりわけコスモポリタン意識が強い時であったという時期的な要因だけに還元出来ない、モロッコのもつ地理的・宗教的因素も大きかったようと思う（これについては後に述べる）。石川に關していうならば、彼のモロッコの印象を読むとき、そしてその後の『古事記神話の新研究』と『地人論』翻訳作業を重ね合わせて解釈していくとき、或る「変容」が石川の中で起つたことに気づく。その新たな局面は、穏やかにいえば「表面化」、その瞬間に即して表現すれば「湧出」といってよいであろう。

モロッコについての石川の印象を見る前に、モロッコがその一環となつて、彼の七年半に及ぶ流浪全体の雰囲気をまず確認しておこう。というのも当時の日本人の外国経験と石川のそれはかなり異なつていたからである。この経験については石川自身が『自叙伝』でもかなりスペースを割いている。また焦点を絞つた研究もある。<sup>8</sup> ここでは少し角度を変えて、戦後、直接石川と交流をもつた二人の青年（当時）から見て、石川のヨーロッパ生活がどのように映つたかを見てみよう。

次の文章は戦後『アフランシ』第三号に載つた石川の「生活態度の革命」の一節である。

私はヨーロッパへ行つて、会ふ人も会ふ人も、悉くといつてよろしいほど、単純生活、労働生活の実行者であり、純潔な修道者のやうに見えたのに驚かされた。エドワード・カーペンター、ルクリュ一族、チエルケゾフ、グラーヴ、トルトリエ、ピエロー、何れも徹底した単純生活者で、各々自らの生活に平和な自然な真実の光を湛えてゐるのであつた。特にアナルシスムを説くのでもなければ、新しい道徳を主張するのでもないが、唯だこの世俗に見られない光と薰りとを身边に放つてゐる。それだけだ。それでその身边に及ぼす感

化力は深刻なのである。<sup>9</sup>

石川晩年の文章である。この文章に関する限り、ヨーロッパでの人々との出会い・交流の具体的な細部をそぎ落とし、理念化の度合いがやや強すぎるが、その分、エッセンスが表現されている。しかし私がこの一節を引用したのは、『アフランシ』発行に関与していた当時二〇歳代前半の大澤正道の感想に注目したかったからである。この一節について大澤は、「これだ、とわたしはおもう」と後に述べている。<sup>10</sup>「特にアナルシスムを説くのでもなければ、新しい道徳を主張するのでもないが……それでその身辺に及ぼす感化力……」というパーソナルな事柄に青年大澤の注意は（たぶん無意識に）向けられていたと見てよいであろう。これは石川がヨーロッパで、カーペンターおよびその周辺の人々との交流の中で、またポール・ルクリュ夫妻との暮らしの中で、身振り、雰囲気として感じたものでもあつたであろうと、『自叙伝』から十分に想像できる。青年大澤もそれと同質のものを今度は石川に感じ、その向こうにかつての中年石川の姿を、すなわちヨーロッパでの石川の暮らし方を想像したのであろう。カーペンターやケイト・ソールト（夫人）は因習的な生活規範を越境するタイプの人間であった。またカーペンターは宗教的に異教への深い感受性をもつ思想家であった。ポール・ルクリュと夫人マルガリットはキリスト教文化の中に暮らしながらもそれに距離を置いていた。さらに望月百合子の次の言葉も参考になろう。「ポールさんはね、本当に日本のどこかのお百姓さんのおじさんみたい、そんなですよ。の方も大学の先生しておられましたが。それでも、しおりゅうドムに帰ってきてね。お講義は、どこか南仏の方でしていましましたが、でも休みの時はドムにいて、しおりゅう畑をやつっていました。」<sup>11</sup>

西欧において、近代と共に表面から地下にあるいは周辺に追いやられたもの、それが石川の先ほどの引用の中

の「単純生活者」という表現の裏側の意味であろう。石川が出会った人々はどこかにそうしたものを、彼が後に使う言葉でいえば「原始」を、保持していたのである。そしてカーベンターモルクリュ夫妻も出会ったその日から、東洋のこの流浪者を受け入れた。「説」でも「新しい道徳」でもないもう一つの西洋の存在を、大澤は文献によつてではなく感じたといつてよいのではないだろうか。

大澤より何歳か年上であり、昭和三〇年代の初めに石川の自伝『浪』、石川著『わが非戦論史』、『石川三四郎書簡集』、『福田英子書簡集』を自費出版した唐沢隆三は石川について次のように語る。

あの人〔石川〕はね、ベルギー、フランスにて、ルクリュのところなんかにいて、ただいて居候というのは、気が引けたかなんだか、いろいろ手伝つているんですね。おそらくそういう時に薪割りなんかしたんじゃないですか。薪割りは本当に上手ですね。うちへ来て泊まつてゐる間、石川先生はよくやつてくれました。……これは私の推測ですよ、石川先生はヨーロッパに行つて、生活があれで、ルクリュのところなんかで厄介になつたが、ただ遊んでいて、食つてゐるのでは心苦しい、それでルクリュのところの奥さんの看病をした、ということで薪割りもやつたんじやないか、と。……フランスではね、愛せられていつしょに暮らしていくためには、努力してこられたと思うんです。だから「日本でも」、やっぱり、他人の家へいらつしやつても、そのように同じようにな、この家の薪割りで助けてやろうというお考えがあつたんじやないですか。うちでも、一回やつただけではありませんよ。何遍もね、うちにいる間に薪割りをして下さつた。……でも、あれは、やっぱり薪割りの心得のある人ですよ、私はそう思う。生活からでていますよね。<sup>12</sup>

唐沢は『柳』という雑誌を刊行する中で、独自な仕方で石川三四郎研究を続け、次々と意義深い資料を提供し続けた。唐沢と大澤が表層の「フランス仕込み」の基層に見たものは、説や新しい道德を主張する思想家ではなかった。彼等が見そして感じたのは都会でアナキズムに関心のある人々の小さな集まりで石川が示す雰囲気であり、また地方で講演の後、周囲の人々とのパーソナルな空間の中で示す身振りであった。大澤と唐沢は身振りと雰囲気の向こうに石川のヨーロッパでの流浪と生活を一瞬感じたことがあつたであろう。それは当然のことながら、国費留学生・研究者や、政府派遣の西洋観察者のまなざし・姿勢とは異なる。<sup>13</sup> すなわち、ヨーロッパの文化や学問の最前線を吸収し伝達しようとする姿勢、まなざしではなかつた。かといって、ヨーロッパの地で自由を満喫し、根無し草であることを逆手にとって、創造の新たな地平を切り拓いていく解放的な芸術家の姿でもなかつた。事実、石川は芸術家にとって活力や意匠を吸収するにふさわしいパリ、ロンדוןを生活の場とはしなかつた。ロンדוןは「素通り」しイングランド北部の小村ミルソープを訪れ、パリからは汽車で一日かかる中仏の田舎町ドムで暮らした。

石川には「場所の力」に引き寄せられる面と「流浪」に身を委ねる面との双面性がある。人間が多かれ少なかれこの双面性をもつているとすると、石川にはそれがやや顕著に共存していたといつてよいであろう。実際、石川のヨーロッパの七年半は、日本脱出と表現できるような積極的な面よりも、むしろ逃亡・敗走あるいは流浪という否定的な面が強かつた。しかし彼はドムという、中世からの（そして或る意味では旧石器時代からの）小宇宙を保持しているところで、「場所の力」に引きつけられ、自らも引き寄せることによつて、自己を確立し直していく。

モロッコにおける石川三四郎、これは二重にも、三重にも、四重にも奇妙な立場であった。さらにモロッコそのものが地理的にも歴史的にも根本的な魅力を孕む場所である。地理的には地中海と大西洋に面したアフリカ西北部に位置する。アトラス山脈の南側はサハラ砂漠に続く乾燥地帯であるが、山脈の北側と北西側は肥豊な農業地帯である。石川が滞在したマラケンの南には四一六メートルのトゥヴカル山が聳えている。民族的には先住民ベルベル人、七世紀に侵入してきたアラブ人、そして二〇世紀初めのヨーロッパ人から成る複合社会である。ヨーロッパ人にはフランス人の他、イタリア人、スペイン人、ユダヤ人が含まれ、文化は重層化し、コスモポリタンの要素が強い。宗教はイスラム教であり、その習慣、儀礼を国民的な特徴として保持している。学問的にはアラブ文化の一中心として九世紀以来の伝統を誇るカラウイーン大学（イスラム大学）がある。石川が滞在する数年前の一九一二年にはフランス保護領となっていた。しかもボール・ルクリュの弟アンドレはこの非ヨーロッパの広い地に暮らすヨーロッパ人である。さらにまた石川がここへ来た目的は、アナキストの地理学者ボールの夫人マルガリットの看病のためである。そして石川はマラケシに住む最初の日本人でもあった。

当然のことながら石川の目に映るモロッコは新鮮で、神秘的である。印象をいくつか読んでみよう。カサブランカに上陸したルクリュ夫妻と石川は、首都マラケシへ向かう。乗り物は途中何度も故障することになる自動車である。

此大平原には色の濃い雑草はなく、シャボテンの墻（小さきも一丈程の高さに生育す）を廻らせる村落（村落と称するも家屋と見るべき程の設備がない。恰も露營のテント生活のやう）が稀存して居なかつたなら真に一種の沙漠と異らぬ。此大平原を東方に擁するアトラス大連山は永世不朽の白雪を冠つて峨々天に聳えて

居る。私共の飛車は此雄大なる高山を目指して突進を續けた。壯絶快絶、眞に是れ生来最初の快旅行である。『無人の地を行くが如し』といふは一の形容詞とのみ思つたが、今私共は事實無人の地上を飛んで居るのである。<sup>15</sup>

一日で着くはずが三分の一進んだだけで、村宿で夜を明かさねばならなくなる。セッタという小都市である。

清泉に接して一面の廣場があつた。其處には村落の群集が、薄暮の清涼に平和の歎樂を貪つて居た。水を汲んだ男女が水壺を頭上に翳して、シャナリ、シャナリと行き交ふ様はたまらない哀愁をそゝつた。五六歳の子供達が鞍も手綱も無い驢馬に跨つて縦横自在に駆け廻はり、喜び叫ぶ様の珍しさ。私はかうした光景の中に自ら神仙譚中の人と化したる心地で、暫しは恍惚として我を忘れた。(六七七頁)

そしてようやくマラケシのポールの弟アンドレの家にたどり着く。その時の石川の心の開かれ方はやはり、イングランド北部の小村ミルソープに対しても、また中仏の田舎町ドムに対してとも異なつてゐる。ヨーロッパとアジアの接点での、或る不思議な解放感に浸る(六七八頁)。それは、さすらう人の特權であつたといえるかもしれない。そして石川はドムの町で或る「原始」を嗅ぎ分けたように、カサブランカからマラケシの道中ですでにそれを感じていた。ドムの「原始」が旧石器時代に遡るドルドニュ地方の隨所に点在する遺跡と古代民族の気配であつたとするなら、ここでの「原始」は非ヨーロッパの「野生」であつた。

自由と解放の伴うこの流浪は、しかし石川の場合、行く先々での具体的な出来事の中で、「義」という観念と

絡み合つた形で表現されていく。これはかつてキリスト教社会主義者であつて、終生社会運動家であり続けた石川の一つの特性といつてよいであろう。その過去との連続性の中で、或る形で心の扉が開かれる。それはこれから明らかにしていくよう、石川独特のアナキズムへの変化であつた。あるいは「義」に対する感覚が複合化していく過程でもあつた。存在を存在として認めながら、それをより広い空間と時間の中に置き直していく視点への変化といつても良いかもしれない。これは日本、ブリュッセル、ミルソープ、ドムで少しづつ生じてきていたものであるが、地中海の南の地で、一層鮮やかになっていく。次のユーモラスな逸話を語る彼の伝え方に注目しよう。

私は此虐げられたアラブ人と之に君臨する佛人との関係に就いて、一つの挿話を茲に紹介する。……此ルクリュ家に屢々出入する人に矢張り佛國の舊い貴族でド・ラトウレットといふ侯爵があつた。此人は佛蘭西本國が大きらひだといふ。それは、どういふ次第かと聞くと、ド・ラトウレット家は彼の大革命以来、或は財産を没収され、或は破壊を受け、民衆のために災禍を蒙ること数次に及び吾々の敵は民衆だと心から信ずる様になつたのだといふ。現在の主人公は未だ五十歳に充たなかつたが、其思想は非常に徹底せる反動主義で、『吾々の生活は階級闘争の生活だ』（是は或は非常な急進主義かも知れない）と常に自ら稱してゐた。日本などでは、階級闘争を説くものは無産階級か、左なくば無産階級の味方となる人々であるが、此無産民衆を敵として階級闘争を行うといふ貴族があるのは、恐らく珍しいことであらう。（六一、六二頁）

階級闘争という概念が社会科学的に定義されていくのではなくて、むしろ陰翳ある現実を活写するための表現の

中で使用される。この文章が昭和二年に書かれたことに留意していただきたい。この章「勃興のマロツク國」での石川の語り方は、現地で絶望的なまでに孤立無援で、自らの銃と凶暴な犬しか頼るものいのないこの夫婦に冷笑的ではない。存在を存在として認める立場。現地人はすべて敵とみなしていたこの貴族夫妻は、石川のこの立場・受容の仕方を半分理解し（そして半分誤解し）たのであろう、石川に次のような要請をする。

全雇人が主人からは敵なのである。其敵を使つて生活する侯爵君の事であるから、其人相も自ら冷酷を極めてゐる。然るに此侯爵君、何を考へたか、ルクリュ氏を介して私に是非支配人になつてくれと申し込んで來た。是れは流石のルクリュ氏も困つた。此主人と労働者との間にはさまたのでは、どんな敏腕な支配人でも、労働者に打ち殺されるか、主人と喧嘩するか、それより外に道はあるまい。『石川君は巴里に仕事ががあるので』と断つたが、もともと私の素情を話して後の事であつたので、それでも、都合してといふのであつたが、私は勿論其恐ろしい地位に戦慄して一も二も無く断つた。（六五頁）

石川の「階級闘争」という言葉の使用には、学者や実践的運動家のそれと微妙なズレがある。石川にとって「階級闘争」は一つの原則として中心に置かれていない。終生石川は「階級」という言葉にたいして或る距離を置いていた。むしろ彼はその思想の営みにおいては、様々な土着の生業の人々、すなわち「土民」という概念を中心にしていく。いま問題としているモロッコ滞在後、日本に帰還しての、文字通りの第一声が、「土民生活」であった。石川の使用法においても、また日本語の從来の使い方においても、「土民」は場所に係わる言葉である。彼が社会運動や歴史を考えるとき、階級闘争に距離を置いているのは、一つには彼が地理的環境、場所を重

視していたからであろう（階級と歴史が深く関連づけられる「今日までのあらゆる社会の歴史は、階級闘争の歴史である」『共産党宣言』と対比されたい）。「土民」が場所を抜きにしては考えられないよう、問題は階級闘争に収斂しきれないという視点を石川は取り始めている。日本脱出直前の数年間、とりわけ明治三九年箱根山大平台林泉寺に内山愚童を訪れた際に顕著であった、石川の心と体と思想の悩みは、いま、或る方向の中で乗り越えられつつあった。流浪と場所の力という双面性の中で、彼は階級を相対化する別の視点を一層強めつつあった。

さて、今までのモロッコでの印象は、フランスのドムでの暮らしの延長線上にあったといってよいであろう。しかし次に述べることは石川が、当時の日本の知識人と共有していた問題であり、同時にまた彼がやや異なる立場にいたことを示す問題である。すなわち、アジア・民族の問題である。彼がルクリュ夫妻とボルドーから西洋周りでカサブランカへ行く直前の回想を見てみよう。アジア、モロッコ、西欧の中で、彼が自分をどのような位置にいると感じていたかが、その行間からうかがえる。

其「旅券などの準備の」間支那人の國際平和協會本部（其中には朝鮮共和政府の事務所もある）に招かれて、御馳走になり乍ら、色々と日本に対する苦情を聴いた。眞面目なる青年達の人間的な告白は、私に取つては、大いなる教訓でなければならない。

佛人に対しても動もすれば、叛逆せんとするマロツク國に旅せんとする、首途に當つて、支那青年の苦言を聞くのは、何だか私にとつて深い意味がある様に思はれた。二十世紀に於ける大問題たるべき人種問題に就て、日支両國民は、今日より大なる覚悟を以て進まねばならぬと思はれた。（六七〇頁、傍点引用者）

中国人との交流は、石川も福田英子も以前から深かつた。それは宮崎滔天と福田・石川の繋がりも作用してい<sup>た</sup>であろう。<sup>16</sup>また一九一三年渡欧直後、ブリュッセルで石川は中国の青年華林たちと表面的でない接し方をする。<sup>17</sup>しかし今の引用文は、実はマラケシから日本の『萬朝報』に送ったものである。傍点部分に注意していただきたい。これはやがておとずれる石川の或る変容を示唆している。今は石川の視点の底流に東洋（オリエント）があることに留意しておこう。

非西欧の事柄は、当然のことながら最も具体性をもつて目に見る商品の問題で石川の思考を揺さぶる。モロッコでも当時、日本商品を目に見る。が、それは欧米諸国での商工業者の手を介したものであることに口惜しさを感じた後で、石川はそういう民族的<sup>ナショナル</sup>な視点を離れて、局地的な市場圏の問題へと入っていく。それはほぼ同時代にインドでM・ガンディー達によって取り組まれていた問題と同質である。

併し、日本工業品も、欧米諸國工業品も、此地方「モロッコ」を最上の好市場とすることが出来るのは、さう長い時期ではあるまい。……各國の産業的差異、國際的分業は、打勝つことの出来ない各地の地理的相違に基くもの以外には存在しなくなるに相違ない。印度の棉花をマンチエスターに運び、其マンチエスターで出来た綿布を再び印度に輸入するといふ様な不経済な、愚劣な仕事は、もう行はれなくなる。マロツクにて多量に産出される磷酸塩の如きは、是れはマロツクの地理的天恵ともいふべきで、印度の棉花と同様に其產地に取つては貴重なものである筈だ。マロツクの磷酸塩は先づマロツクの農業開発に使用して、其餘剰を輸出すべきである。印度の棉花は印度の紡績工場にて加工され、印度人の幸福の為に先づ第一に使用せられねばならぬ。（六七、六八頁）

ガンディーが南アフリカからインドに帰国して、最初の政治的な活動が一九一八年のアーメダバートであった。

これはいま問題としているモロッコの石川の一年前である。ガンディーの場合は大英帝国、インド、アーメダバートが共同体として重なり合い、その中の最初の断食であった。それにたいして石川にとってこの局地的市場圏への洞察の裏側には、明治期前半の鉄道の開通によつて地域の拠点として繁栄していた実家・船問屋の共同体の中での衰退、カーベンターによつて示される現実の生活の場としてのミルソープの村、数年間暮らした小宇宙をも思わせる小さな町ドムがあつたといえよう。それは、石川の場合、経済理論や、国際的な帝国主義の問題以前に、自足の側面の強い現実の生活空間としての場所、そこでの実質的な暮らしの力と共同性が彼の見方の背後にあつたということである。ガンディーの運動が、単純に反帝国主義運動に還元できない共同性の中での道德的・政治的なものを含んでいたとするならば、石川のこの洞察は理論的な展望に還元できない、具体的な自足した生活を可能にする場所への志向が含まれている。

これまで七年間に渡つて石川はベルギー、イギリス、フランスで生活した。それらの場所は植民地ではなく、植民地本国の一地方であつた。ただ、それぞれの場所で彼は当時の日本の留学生、商人、官公吏の暮らしぶりとは非常に異なる生活を過ごした。日本から逃亡に近い形で出国した石川が、ヨーロッパで「単純生活」への傾きのある人々と接することが多かつたことについては、すでに触れた。しかしま問題としたいのは、出会った人々のそうした特性ではなくて、こうした人々の背景を成している局地性・地域性への石川の配慮である。一点簡略に例示しよう。一つは大正三年（一九一四年）石川はブリュッセルで万国児童研究所のボーランド女性を訪ねる。当時ボーランド人は「亡國の民」であった。石川がそこを訪れるのも、「常に亡国民に対し注意を怠ら

ない」ようにしようとしている彼の想いが行動に出たものであった。<sup>18</sup> 三国分割を経て祖国の亡くなっている人間に對する石川の関心に先ず留意しておこう。もう一つは、石川はイギリスで一九一四年の初めの頃と一九一五年にロシア人チエルケソフに会っている。一回目の時は、ポール・ルクリュからクロポトキンとチエルケソフの二人への紹介状をもらつていたが、同じイギリスでもクロポトキンは距離的に離れたところに暮らしていたため、チエルケソフにのみ会った。二回目の時は、チエルケソフと一週間にわたつての交流があった。石川のチエルケソフについての回想は次のようである。

翁は身長も低くて、瞳も頭髪も鬚も黒く、吾々東洋人と其相貌が酷似してゐたので、私には特に親しみ深く感じられた。其名も自らチエルケソフと称した程で、チユルク人を以て自任したであらう。ジョルジヤは太古バビロン帝国の文明を直継した国として、其周囲の諸国と全然異なつた國語と文字とを持って居る。<sup>19</sup>

この出会いからほんの何年か後に石川は、ロシア革命で一旦はロシアに戻つたが再亡命してきたチエルケソフから「ジョルジヤ民族に対するボルシエビキの暴戾殘虐」をポール・ルクリュを通して知る。ポーランド人といふ「亡国の民」と同様に、「ジョルジヤのチエルケソフ」への石川の焦点の合わせ方に注意しよう。

モロッコ「経験」がなかつたとしても、石川は第一次大戦とその後の民族自決の方向の中で、新たな世界情勢の認識へと進んだであろう。事実、モロッコ行き直前の『萬朝報』へ送る文章は、彼が普通の意味で世界の情勢に機敏に対応していることを示している。第一次大戦終結とモロッコ行きの間に石川は「新興文明」「國際聯盟」「新歐列國」を書いている。「政治」に距離を置いた石川の論調は従来の（政治や政府に期待を寄せない）ポジショ

ンからの、新たな情勢への論評以上のものではない。

政治家といふ世界の遊蕩児が、是れからあのベルサイユ宮殿の暗室で狐々然鼠々然として焼き揚げようとするブラツクは、此度の大乱を機として新興すべき二十世紀文明の真潮流とは左程に関係の深いものでは無い、否二十世紀の文明の大潮流に対比すれば、ベルサイユ宮殿の世界的下水会議の如きは太洋上に浮かべる一泡沫ほどの価値も無いものである、然らば二十世紀の新興文明とは何であろうか、此大戦の教訓によりて、産業組織、軍隊組織、政治組織等に大革命が行はれつゝあり、又行はるゝであらうといふことは、是迄反復したから茲には説かない、前に書いた民族主義が高調せられし結果、民族的意識の喚起が行はれ、從来改革者の誇りとせられたる自由、平等の主張よりは、寧ろ協同と奉公との精神が力説せらるゝ点は、深く注意せねばならぬ「新興文明(二)」(一九一九年二月二十五日号)

それに対してモロッコ後の、すなわち日本に帰国してからの次の文章も、一見したところでは、通常の、第一次大戦後の世界情勢分析の一つに過ぎないかも知れない。だが、或る微妙な変化が読みとれないであろうか。

アーフリカは、今復活しつゝある。埃及住民の英國に対する叛逆運動や、マロック人達の西佛兩國に対する叛逆運動の如きは、此偉大なる復活運動場に現はれる小さなエピソオトに過ぎない。

文明の普及は、かうして印度をも復活させるであらう。ハムラビ法典と航海術とゾロアスターとを後世に伝へたバビロン帝國のメソポタミヤをも復活させるであらう。支那は今、復活の苦惱を體験してゐる所だ。

ロタシヨンとレヴァオリューションとは、地球其ものゝみの運動ではない。此回転運動は世界人類の生活其ものにある。（六九頁、傍点引用者）

この文章で注目したいのは、人間生活の展開（歴史）を、地球の自転ロタシヨンと公転レヴァオリューションとの関連で述べてある点である。これに近い考え方（たとえば「宇宙的意識」）はすでに、エドワード・カー・ベンター、ポール・ルクリュとの交流、彼等の著作の読書から石川の中に観念として入っていた。それを思想の影響という事はできよう。たしかに石川は人々の生活、すなわち「土民」の暮らしとそれに支えられる思想を田舎町ドムで文字通り体得していた。しかし、その経験が、地球のリズムである「ロタシヨン」「レヴァオリューション」との関係で、言葉は矛盾してしまうが、血肉化されながら理論化されていくためには、ボルドーから四日間船酔いにあいながら大西洋を渡り、アフリカのモロッコの地に立つという空間の移動（それは日本からヨーロッパへの移動とは異なるもう一つの移動である）、そしてモロッコといふ場所の力の吸引力と、それへの彼自身による引き寄せが介在していたといえよう。少なくとも、その移動後の場所の力の中で、「地理は空間の歴史にして、歴史は時間上の地理なり<sup>21</sup>」と述べるエリゼ・ルクリュの『地人論』を初めて読んだことの意味は消すことができない。だから「勃興のマロツク國」の末尾「マロツクの事を思ふと、激動たる地球全人類の動きが、まざまざと眼前に浮かんで来る」は修辞的誇張ではなかつた。時代としては「民族」が興隆しつつあつた。石川自身としては独自のアナキズムへの傾向を強めつた。その興隆の息吹と、アナキズムを介绍了世界との石川における受け取り方が、この「思ひ出」に現れてゐる。これが石川のモロッコにおける「変容」の一面、あるいは顕在化した面である。それはモロッコ以前の石川の経験の、モロッコを契機としての深化である。

しかしながら、石川のモロッコは、アジア、アフリカ、世界という大きな顕在化された表現で語りうるものだけであったのだろうか。石川のモロッコでの「変容」あるいは方向付けには、方向付けという言葉では摑みきれない或る意味で未分化なもう一つの面がある。この未分化なものはアフリカという場所であつたが故に彼に訪れたものであつたのではなかろうか。

コランと剣とは常に不可離のものゝ様に聯想して居た私も、今日マロックの人々が多く小脇に短剣を帯びるを見て、一度は異様の感を惹起した。併しコランの信者たる民衆が、其百姓馬丁に至る迄金色燐爛たる剣を提ぐるも決して不思議では無い。私の家の下僕にモハメットといふ青年がある。アトラス山中の産だといふ。姿、進退、恰も古羅馬帝国民の再来では無いかと思はれる程立派である。或はラシンやコルネイユのクラシック劇に出る勇者を現実に見る心地がする。其モハメット君の総財産は肌着一枚、純白薄毛織の上衣一着、胸に掛くる革サック、彎曲せる小剣一振りである。黄色のスリップは其内に数へるには餘りに古びて居る。

彼は寝るにも是れ、起きるにも是れ、野に働くにも、馬に跨るにも、常に其総財産を携へ、其以外には何物をも持たない。悠々として迫らず、朴訥無飾にして而も自ら高雅なる。世界第一の貴族的國民だといふ世評に反かない。(六八〇、一頁)

この石川の具体的な描写と行間から感じられる彼の驚き、想いに眼を凝らしてみよう。このような即物的な表現をその後彼はしなくなる。しかし石川はこれを或る別の経路を通して、濃縮した形で表していく。「生命」、「原始」という彼の表現はそのひとつであろう。そしてその背後に宗教への今までとは異なる配慮がある。石川は「ド

ムで、周辺の旧石器時代遺跡を見聞した際、この生命・原始に直接触れたはずである。しかし旧石器時代は數万年という時間の隔たりがあるため、その原始という文化は想像の世界であった。だが、モロッコの空氣、におい、空と人々は、想像の世界ではなく現実のものとして、存在として石川に迫っていた。

帰国後の石川は、結果的には、この原始・生命を、正面から捉えて色合いのある形で展開する道を取らなかつた。原始・生命は生の形では表さず、すなわち文学的な表現ではなく、むしろ「学問」という形で、「保守」「社会美学」というような概念化の形で、深めていく。石川の原始・生命は、大正時代の「生命主義」と共振しながらも、彼はそれを表面化させるよりもむしろ地下水脈として保ち続ける方向にすすむ。<sup>22</sup>

要約するならば、モロッコの土、砂、青空の中で生命・原始を体感していた同じ頃、それを抑制する、或いは抑制するに値すると自ら考えるほどの異様な高揚を石川は経験したのである。そしてそれこそがこの生と知の噴出にも係わらず、それを抑え、その後の石川の仕事を方向付ける高揚であった。それはドムでも、ミルソープでもなく、マラケシで生じた。

## 二

それは現れとしては、本稿のために引用したエリゼ・ルクリュ『地人論』の原書を丹念に読む環境が得られたことと、『雷光の如き明光が投げられ』『古事記神話の新研究』の原稿を書いたことの二つである。ところで、石川が日本に帰国した翌年に出版した『古事記神話の新研究』（大正一〇年刊）はどのような内容のものであつたのだろうか。本書第一二章「ロアジ教授の意見」の中で、石川は内容の「覚書」（要約）に当たるものを作り、仏文にしてソルボンヌ大学のロアジ教授に送り、意見を求めている。石川の要約一二項目すべてを載せるべきな

のだが、紙面の関係上、最初の四項目のみを書き写してみよう。

一、日本民族移住の約束の地は『豊葦原の中つ國』と稱せらるゝが、日本に斯の如き地方が存在しない。私は之れメソ・ボタミヤを指示するものであると信ずる。

二、日本神話中には鰐に関する歴史があるが、此動物は紅海或は印度洋沿岸の外には生息しなかつた。而して此動物は日本傳説に於て『ワニ』と稱ばれ、其音は頗る彼のカルデヤの傳説中に存する『ヴァネス』に類似する。

三、移住記の最初の人物、日本帝至祖神の嗣子『正勝吾勝々速日天忍穗耳命』は、彼のパレスチンと小亞細亞との間に一大帝國を建設したるヒツチト人と同族であつたと思ふ。何となれば、『正勝吾勝勝』（個人の名稱に冠うせたる）の語は、之を文字通りに翻譯すれば『眞との勝、吾が勝勝』といふことになる。而して此『カチ』は『カアチ』即ちヒツチトであるかも知れない。

四、移住記の第二人物、即ち『カチ、カチ』の子は、實際に移住した。而して其移住の案内者を『猿田彦命』と呼んだ。私は此嚮導者を以てカルデヤ人或はカルデヤ人の團體なりと信ずるものである。蓋し『サルダヒコ』はサルダの子を意味し、サルダは即ちカルダである。而して『ノ命』は『ノ團體』（或は尊號）の外に解釋することが出来ない。<sup>23</sup>

単純化していくと石川は日本民族の起源をメソ・ボタミアに置き、その論証を特定の言葉および地形表現の類似性によつて進めていく。これに対するロアジ教授の返答は極めて否定的である。

単に偶然なる言語の接近や、又他人種の国語を当てはめても同様な結果を得る様な類似語の存在のみでは、未だ充分とは言はれません。其伝説の上に根本的の一致を存せねばなりません。<sup>21</sup>

即ちロアジは、日本人の起源をメソポタミアとするのであれば、両者の神話的伝説の構造的な類似を明らかにせねばならず、またメソポタミアから極東への移住の足跡を確かめねばならぬという。本稿の目的は石川の仮説の検証ではないけれども、モロッコの石川の「変容」に根本的に係わる点は触れておかねばならない。

『古事記神話の新研究』の原稿を書いた環境が必ずしも恵まれた情況ではなく（マラケシという場所で婦人を看病しているという閑ざされた空間であり、二〇世紀初頭の宗教学や神話学のうねりから離れていた）、また研究・著述の期間も短かっただということを考慮に入れるとしても、彼の神話研究は極めて実体的であり、シンボルの問題を避ける、あるいは排除している。たとえば初版本「第七章 岩屋戸集会の神話学的研究」では「冬と夜との徵象」の節を設けている。しかしこれは型どおりの一般的な知識に近いものであり、著書全体の論の進め方は象徴の方法からは遠い。私はここに石川三四郎の思想の根本的な問題があると思つてゐる。「狭さ」「欠陥」といってよいであろう。それは思想家としての石川を全体としてどう評価するかという問題に係わつてくる。別の角度から一例を挙げてみよう。石川は「階級的分業」の分析として次のような平板な説明を行う。

例へば一部落の長老中に特に知力と記憶力との発達したものがあるとする。太古の暦を持たない民衆にとっては呪はしい酷寒の冬の期節、即ちサムソン——サムソンはアラビヤ語のシユムシと語源を同じくしセミチック語の太陽といふことである——の健康の最も衰へる時期には民衆の悲哀は極点に達したに相違ないが、

その時、智能の優れた長老が、その長い経験と記憶とに基いてやがてサムソンの体力復活の時期、吾々を救ふために暖かい春の日を持つて来る時期を予言したとすればどうであらう。或は初夏の「雪しろ水」を予告し、或は二百十日の暴風を予言したとすればどうであらう。心の単純な部落の全民衆はその長老を救主として神様の如く尊崇したであらう。そしてそれに自分等の持つてゐる最も善きものを捧げたであらう。かくして長老は生活のために労働もせずに専らその長じた研究に従事して益々智能を啓発したであらう。そして、その集積された学的知識は自然にその子孫に伝へられ、漸くにして特殊階級としての一家族が出来たであらう。これが或は戦争の場合の武将ともなり、又は武将と結託することにもなつたであらう。王様の起源をたづねると此くの如くである。<sup>26</sup>

ところで石川はこの説明をエドワード・カーペンター著『異教とキリスト教教義』（一九二〇年）を一つの拠り所としていることは間違いない。<sup>27</sup> しかしながらカーペンターは、（一）宗教的儀式と天空の太陽や星の観察との結びつきが、天上にいて地上を支配する神々の創出に繋がること、（二）宗教が地上での季節の変化、野菜や食物の生育に結びついていること、（三）宗教が人間の個人の身体、性と関連していること、の三つを、（三）（二）（一）の順で人間にとつて基本的である、と分析していく。<sup>28</sup> それは「王様の出現」という石川の脈絡ではなくて、多様な民族の宗教觀と、キリスト教徒の類似性の脈絡である。たしかに、石川の文には或る「語りかける」要素が含まれている。しかし、その單調な説明と、カーペンターの複合的な幅野の広さの対照は歴然としている。カーペンターの『異教とキリスト教教義』が、事例豊かな民俗学の文献を読むときのような高揚感を与えてくれるのに対して、『古事記神話の新研究』には読者を學問的に喚起する力は乏しい。王の出現を民衆との関係で理解する際、

表象と実体の識別がなされず、実体にのみ依拠している。単純さの中にこそ真理はあるとしても、石川の分析のこの平板さは、人間存在はそのような単純な「分析」で覆い尽くせるものではないと、直感する読者は、當時も今もいるであろう。

古事記についての考察として先駆的な発想であったとしても、石川のこの、実体的な分析の「狭さ」は相当深刻である。或る意味では、致命的である。だが、にもかかわらず、前節で考察してきたことをふまえて、モロッコでの石川の「湧出」への道筋に眼を凝らしてみると、これから述べるように、彼の「狭さ」・問題点、まさにそこに、彼の独自の可能性が含まれていたことに、私たちは気づく。即ち、時系列とは別の、もう一つの地理的環境論への彼のアプローチの源泉がそこにあることを。彼のこのアプローチは、當時もそして今も見えにくい。しかし私たちには脇道をたどるという方法がある。

日本に帰国（一九二〇年）後の、即ち石川後半生の彼の仕事は、多様なものであつた（帰国時、彼は四四歳であり、八〇年の彼の人生の半ばを過ぎていた）。その後半生の仕事を、地理的環境論への道として捉えることは、一つの見方として可能である（論点を明確化するため、石川の多面性、あるいは彼の様々な双面性・矛盾には、ここでは眼をつぶる。また、正確さを期するなら「文化地史論への道」とすべきなのであるが、本稿では、時系列だけではない石川の地理的空間の重視をはつきりさせるため、「地理的環境論への道」とする）。大正一四年（二九一五年）の『非進化論と人生』、昭和四年（一九二九年）から九年（一九三四年）までの『ディナミック』刊行、戦中の『東洋文化史百講』、戦後の『地人論』第二巻以降の翻訳（未刊）と繋いでいくとき、後半生の石川の仕事を地理的環境論への道と括ることとは、無理ではない。というのも、『非進化論と人生』第二篇はまさに「地的環境論」という表題であり、『ディナミック』の刊行は千歳村・共学社を根拠地にして、地方の土着の生業に携わる誌友たちとの交流・実践の営み

だからである（この実践は地理的環境論の応用編ととらえてよいであろう）。さらに又『東洋文化史百講』は、東洋文化を地理と歴史の交差の中で考察していく作業であるが、老子の章も、后土を語る章も、地理的分析が特徴である。昭和五年に第一巻を刊行した『地人論』は、原題は、*L'Homme et la Terre*（人間と大地）であり、復刻の際は『世界文化地史体系』第一巻（一九四三年）とされたこともある。そして結果的には彼は最後の仕事として『地人論』第二巻以降全六巻の翻訳刊行を選ぶ。当然のことながら、彼の地理的環境論への道は、彼の前半生との連続の上に成り立っている。しかしそこには、「飛躍」に当たる事態があつたことを見落とすことは出来ない。石川は自らの仕事の基層におけるこの事態を、基層であるが故に、多くを語れなかつたし、語らなかつた。一つのエピソードとそれに続く或る経験に眼を凝らしてみよう。

これから述べるエピソードと「経験」はお互に矛盾し合い、そしてお互に補い合つて、或る結果へと向かうものであった。それは日本への「接近」と日本の相対化といってよいであろう。石川は象徴を意識的に使う思想家ではない。又そうした方法にことさら意義を認める思想家でもなかつた。しかし自らは意識していないくとも、象徴を使つてしまふ、あるいは象徴を生きてしまうということはあり得よう。次のエピソードは石川の心の扉が一つ開かれる前に彼が越えねばならなかつた境界をシンボリックな形で示している。吐くということ、そしてオクシデンントからオリエンントへの境界を越えることが不思議な繋がり方をしている。ボルドーからモロッコへ向かう船上で、先ずルクリュ夫人が、次いで石川が吐き始める。四日目に漸く海も穏やかになり、石川の聴覚は奇妙なるものを聞く。

耳を澄ませば、此方では、カツボレを踊り、彼方ではステュコに調子づき、アリア／＼コラ／＼杯と囁し立

てる聲さへも歴々と耳に入る。そして居る間に、其の雜音の奥から私の幼時の記憶を喚起した。幼時に見た盆踊の光景が明白地に頭腦に浮かんで來た。高い櫓の上で、三味線、太鼓、つゞみ、笛、なんどの囃しに連れて、音頭取が唄ふ。而して其の周囲を数百の男女が手並足並を揃へて舞ひ廻る。(六七二頁)

この時、隣のルクリュ夫人はワルツの幻聴を聞いているので、ひどい船酔いの直後にはこうしたことばはあることなのかもしれない。しかし石川が自覚していたかどうかとは別に、この吐瀉とその後の幻聴は、一つの通過儀礼であつたように思える。そしてその時彼が耳にしたのが記憶の古層にあつた共同体の祭りであつたということは、やがて訪れる古事記解釈の発意を象徴していたといえよう。そのようにして辿り着いたモロッコの地で石川は人々の体つきについて次のような印象を持つ。「私は自分の出會した多くの九州人と、現に目撃するベルベル、アラビヤ人とか、其骨相、姿勢等に於て甚だ近似せるを合點する」(六八三頁)。象徴的な意味でも、物理的・空間的な意味でも石川は地中海の南側にあるモロッコでオリエントに近づいてきていた。

イギリス人カーベンターとフランス人ボール・ルクリュ夫妻は、キリスト教文化に暮らす人々であつたが、一神教に対し距離を置いていた。<sup>29</sup> カーベンターはインド文化にたいして深い感受性を持つていたし、私生活においてもユダヤ・キリスト教文化のタブーに触れていた。彼等にはヨーロッパにおいて中世、近代と進むにつれてキリスト教によって周辺に追いやられていく土俗的なるものが、アナキズムと結び合う形で確実にあつた。しかし、彼等自身はそうであつたとはいえ、石川が暮らしたのはキリスト教文化圏の国々であり、折に触れて超越神をいだく一神教文化に生活の随所で直面したことであろう。多神教あるいは非一神教の国から來た石川はヨーロッパで、超越神から外れているカーベンターのサークルで、またアナキズムという点でキリスト教に距離を置

いているルクリュ夫妻の圈内にいることで、風土・習慣では一神教をめぐる問題に気づくことはあつたとはいえ、宗教問題に直接対峙する局面は少なかつた。ドムに暮らす石川にとってヨーロッパは、周縁の土俗的なるものとキリスト教文化の融合したものとして映つていた。

彼はモロッコに行って初めて、もう一つの一神教（超越神）の国、イスラム文化の存在を、知識だけではなく、その場所において現実に知る。しかもそこには「一般近代社会の通弊」と共に、「朴訥無飾にして而も自ら高雅なる」人々が示す「原始」があつた。ヨーロッパとは異なるイスラム教文化と地理的環境の中で、この時、石川は心の扉が一つ開く。カーベンターとその周辺の人々との出会い、ルクリュ家の人々との生活の中でその用意はされていた。それは「影響」という言葉を使ってよい性質のものであろう。しかし人間には、そして思想には「影響」という言葉で済ますことの出来ない事態がある。石川の場合、思想・宗教の面で或る枠が外れるためにはもう一つの一神教の国、そして根本的に自然環境の異なる空間に展開するイスラム文化とアフリカの風土に接することが必要であつたといえよう。後年『東洋文化史百講』の中に次のような描写がある。

回々教徒は日暮れを讃美します。夜中になりますと、高い塔に上つてアラーの神様を呼んで救を求める。アラビヤ人の都市に行きますと、毎晩神を呼ぶ声が聞えます。モスケの一番高い塔の上に登つて一番声のいゝ人が神を呼ぶのであります。<sup>39</sup>

これはマラケシでの彼の日常生活の体験にまず間違いない。ヨーロッパ（オクシデント）では体験することのない空間——日暮れと神を呼ぶ声——であった。しかも同時に石川は、砂漠に起源を持つ宗教という点で、キリスト

ト教とイスラム教の同源性をもはつきりと自覚する。モロッコはその意味で石川を「比較」へと誘う契機であった。後年の『東洋文化史百講』の次のような比較の視座はヨーロッパ、中国、インド、日本の他に、彼のモロッコでの暮らしが見聞に依拠しているといえよう。

ルナン（Renan）が「砂漠は一神教である」と言つたに対して、或る学者は「藪林は汎神教である」と言ひましたが、面白い觀察だと思います。砂漠に興つたキリスト教もユダヤ教もモハメット教もみな一神教であります。が、デヤングル即ち藪林に興つたところのバラモン教も佛教もみな一種の汎神教といふことが出来ませう。<sup>31</sup>

異質な超越神の国、イスラム文化の存在、即ち地中海をはさんでのオクシデンントとオリエントが現実に存在することに触れることで、石川は一神教と見えるヨーロッパを、今までとは質的に異なる深さで相対化し始めたのである。<sup>32</sup>

この石川の変容を整理してみよう。それは穏やかな多元性を受け入れる視座の形成であった。別のいい方をすれば、普遍性・抽象性を持つた国家を、具体的・実体的な生と暮らしによって越えていく視座であるといえよう。次に引用するように石川はロアジ教授に再反論するのであるが、それは仮説の証明としては不十分、あるいは的はずれであった。しかしヨーロッパ人のロアジ教授には見えにくいものを、モロッコの石川は見ていた。

……ヘブリュウの傳説神話の如く、道徳的批判或は宗教的偏僻を以て之「古事記」を書かれなかつた為に、

到つて多大の人間味、粗樸なる原始生活味が、我が神代記には溢れて居る。是が實に古事記神話の尊い處である。私が古事記を愛讀して來た理由も茲に存する。

古事記神話全篇を通じて表はれたる精神は、之を一語にして曰へば『無邪氣』是である。……之を伝へるに當り、彼のヘブリュウ人の如く或いは宗教的偏僻や道徳的批判を加え、或は之を修正しなかつた。寧ろ之を單純化して或は之を原始化（と言ふ語が意味をなすとせば）して古事記中に編入した。<sup>33</sup>

議論としては精緻化されたものではなかつたが、石川は一神教（超越神）を宗教的偏避という言葉で、或る意味での相対化を行う。そして諸々の宗教神話をもう少し緩やかな視座で見直そうとしている。これは後年の彼の、アメノウズメノ命の裸踊り、老子と中国の后土への言及、そして最晩年の裸の国際會議に繋がつていくものであろう。それ故、モロッコでの経験は石川に即していうならば、イスラムという軸が入つてくることによつて、從來の東洋・西洋という二つの軸による対位が崩れ始めたといつてよいであろう。十数年後に結実する、多元論にもとづく中国・東洋への石川の洞察は、東洋・西洋の二つの軸の崩壊を前提としている（だから昭和八年、中国・泰山での彼の感激は東洋回帰ではない）。カーペンターとその周辺の人々との交流、ルクリュ家での生活の中で、石川に次第に育まれていつた原始と多元性が、モロッコという地理的環境の中で、もう一つの一神教・イスラム文化に具体的、即物的に接することで、形を取り始めてきたのである。<sup>34</sup>

それは少し角度を変えて見るならば、或る未分化なものと、具体的・実体的なもの、この両者との石川の出会いである。すなわち「原始」と地理的環境の、石川への根本的な浸透である。エリゼ・ルクリュ『地人論』をマラケシで精読したことはその象徵的な表れに過ぎない（成熟にはその後時間がかかつた）。明治末に、監獄生活で愛

読するようになった古事記に、今モロッコで「無邪氣」「原始」を読み込んだことと、九州人・ベルベル人・アラビヤ人との間に或る懷かしさを伴う具体的・実体的な類似性を見出したことが、表裏を成している。そこに共通しているのは、上下貴賤の尺度による文明とは異質なものである。そしてエリゼの『地人論』には、国家という文明の共同体とは別の視座がある。地理的環境の視点から見るとき、人間の社会は、国家あるいは政権名で代表される「時代」に収まりきらない多元的な歴史が見えてくる。エリゼの『地人論』に、「原始」「アナルシーア」が顯著であるのは、エリゼの主義という以前に、それは人間の社会を歴史と地理の両視点から考察するエリゼの学問に根ざすものである。一九一九年から二〇〇年のモロッコで石川の『古事記』の解釈と『地人論』の読書の中で生じたものは、彼の後の仕事から推し量るしかない。ただ石川自身が或る力を、あるいは或る根本的な内的促しを感じたことは間違いない。それは地理的環境論への、見えない第一歩であった。象徴的ない方が許されるなら、「朴訥無飾にして」貴族的なアトラス山中生まれの青年と、『古事記神話の新研究』は、モロッコの石川にとって同じであった。青年の向こうに石川は原始とアナルシーア（anarchie）を見、原始とアナルシーアの起源・正統性に依らないという意味で多元性の中で『古事記神話の新研究』を書き始めた。

最後に、モロッコでの石川三四郎の湧出と発意が、その後の彼の仕事にどのような跡を残したかを、そして次に石川個人を離れてその形跡が現代の私たちの生活と学問に何らかの意義を持つているかどうかを考えてみたい。石川は一九二〇年九月初旬帰国の途に就く直前もう一度イングランド北部ミルソープの村を訪れている。そこで四日間を過ごし、カーペンターと神話と宗教の話に明け暮れる。カーペンターは彼の最後の主要著書『異教とキリスト教教義』を書き終えてほどない時であった。「稿を終わったとき、一時失神の体にて、書斎の床上に倒れ

た」といわれている。他方、石川は「雷光の如き明光」に打たれ『古事記神話の新研究』草稿を書き終えたばかりである。石川も語るべき事が十分あつたであろう。例えば諸宗教に共通する冬至の頃の儀式についてのカーペンターの分析に対し、石川はただ聞くだけではなく『古事記』の天の岩屋戸の更生が冬であることをカーペンターに述べたであろう。<sup>35</sup> 二人がこの四日間、いかに学問的にも高揚した気分で語り合つたかは想像に余りある。

石川のヨーロッパへの流浪は元はといえば、カーベンターに会うことが、ほとんど唯一の正当化できる（積極的な）理由であった。ヨーロッパでの求職活動中も、ドムでの農作業、婦人看護の期間も、石川はずつとカーベンターと文通を続ける。帰国後も、例えはカーベンターの死亡の知らせを受けると直ちに『ディナミック』（第八号）で特集を組んで、その死を悼んだ。日本の思想界で最早カーベンターが忘れられた存在になつても、石川にとってカーベンターは最後まで「よい先生」であった。<sup>36</sup> 石川は戦後、長年の宿題であつたカーベンター著『文明——その原因および救済』（日本評論社、昭和二四年）を出版する。だから石川はカーベンターから離れなかつた。しかし一九二〇年八月三一日からのミルソープでの四日間、この時、石川はカーベンターから一步別のある道を歩み始めたようだ。

モロッコでの経験がなかつたとしても、石川はミルソープでの交流から（デモクラシーを「土民生活」とする訳語の選定はカーベンターとの会話に端を発している）、またドムでの暮らしの経験から、場所に基づく土民という概念を展開することは出来たであろう。しかし、地中海の南側の、アジアとは異なるオリエントで『地人論』に出会い、「原始」「アナルシー」を身読し、それを周囲の鮮明な光と空間の中で現実の大地と人と重ね合わせる経験を持たなかつたとしたら、後年の『非進化論と人生』『東洋文化史百講』を支える地理的環境論は展開されたであろうか。また『地人論』の身読と同時進行する『古事記神話の新研究』の發意と著述がなかつたとしたら、『東洋文

化史百講』の老子や安藤昌益への開かれた見方とゆつたりとした語りを石川は紡ぐことが出来たであろうか。<sup>ナラティブ</sup>

帰国五年後の『非進化論と人生』には二つの柱がある。一つはそれぞれの土地でそれぞれの土着の生業を営む土民生活論、もう一つは土民生活の場を包む地理的環境論である。石川は一九二三年日本を去るとき、死を半年後に控えていた田中正造から、「貴方はみつちり学問をしなければいけません」としみじみ諭された。<sup>37</sup> ヨーロッパで人々に田中の思想と行為を知らせることが自分の役割だと石川は思ったが、滞在中その課題を果たすことが出来なかつた。帰国後数年して出版された『非進化論と人生』（一九二五年）はその背後に田中の存在を読みとることができる。また『東洋文化史百講』には明らかに足尾鉱毒事件の谷中村村民を念頭において書いたと思える箇所がある。さらに、水、空気と関連させた形での中国の后土への独特的な洞察、東夷、隠者、「小国寡民」と、明らかに地理的視点を含む老子の評価、江戸時代を日本のルネサンスとする中での安藤昌益の位置づけ、これらをゆつたりとした語りの形式で石川は『東洋文化史百講』を語り進めていく。<sup>38</sup> それはシンボルを有効に使うカーペンターの豊饒な世界ではない。むしろ利根川水系の治水を現実的、具体的に自らの目で確かめるために歩いた田中正造の世界に近い。それぞれの生業に携わる各地方の人々が構成する、また海を渡り山を通つて移動・交易する人々が構成する地理的世界が、国家あるいは、政権担当者の名称で代表される「時代」を越えていく視点である。私が先ほど「石川はカーペンターから一步別の道を歩き始めていた」といったのは、帰国後のこうした足取りを指してである。

次に石川個人を離れ、彼のモロッコでの経験が私たちの生活と学問に意味を持っているのかどうかを考えてみよう。ここでは鶴見和子の柳田国男論との関連で二つのことに触れたい。鶴見は、安藤英治の、中世ではなく古代を近代と対比させるウェーバー後期の洞察を評価しながら次のように述べる。

……原始—古代の社会および精神構造から断絶して近代が生まれたのは、アルプスの南から北へという地理的自然的環境の転換にかかる、特殊西ヨーロッパ的性格だということである。大塚「久雄」の立論は、西欧近代を時系列的発展としてみているために、それが世界史の普遍法則であるかのように受け取られやすい。安藤の解釈は、時系列的発展と同時に地域的環境要因を重視する。したがって、イギリス、ドイツ、フランス等によって代表される西欧近代は、アルプス以北の地域の土着文化として、比較近代史の中に、相対的に位置づけられる。(傍点鶴見)<sup>40)</sup>

西欧近代の相対化と、地理的環境要因の重視とが関連づけられている点は、非常に興味深い。地理的環境という要因は、自然の実体的な地形と人々の具体的な暮らしが含むものであるから、どうしても普遍を基準とするよりも個別を、そして土着を配慮せねばならない。鶴見の論点を本稿に引き寄せて述べるなら、場所(ローカス、ローキ)の力は、比較近代化論にとって突破口となるだけにとどまらない。

次に鶴見和子は柳田国男を論じる中で、景観の美しさについて大変示唆に富む見解を述べる。

自然の景観は、それぞれの地域の住民が、それぞれ生産の場において、土地や海や川が作物や魚介類を豊饒に生み出す力を、たえず保全していく努力しだいによって、美しくもされ、けがされもある。その地域地域の土地や海や川の条件がちがうのだから、生産者の地力、海力、河川力の保全のしかたも微妙にちがつていい。景観の美しさは、それゆえに、一律の尺度できめることはできない。旅人は、地域の生産者の立場に

たって、自然の生産力が、それぞれの仕方でよく保全されている状景を、美しいと見るのだ。このように、漂泊者の眼を、定住者の立場と一致させることを、柳田は主張する。<sup>41</sup>

現在私たちは生態系について考えるとき、美しさあるいは美の問題を避けて通ることはできないのではないだろうか。個人的な美意識でもなく、また超越的な美意識でもない、他の人々との間で共有できる美しさの問題を。鶴見の漂泊者と定住者の二つの視点からの（あるいは漂泊者と定住者と一時漂泊者の三つの視点からの）景観の美しさへの接近は、その意味でそこに含まれている意義の深さは計り知れない。

鶴見は異なる人々の間で景観の美しさが一致する場面として、柳田国男の『豆と葉と太陽』から次の一節を引用している。

大きなよく熟した果樹園の傍を通る。浜へ来て見ると地曳網に鯛が跳ねて居る。斯ういふ場合ににこ／＼として立止らぬ人が無い如く、理論は不明であつても人間繁栄の著しい兆候を見て、好い印象を受けるのは亦自然である。

ここには場所における共通感覚の問題を考えるための洞察がある。「立ち止まる人」と土民生活者とが共有する感覺。今は残念ながらその問題を正面から取り上げることはできない（本稿の目的は、モロッコでの石川の発意と、地理的環境論への道の関連である）。最小限の言及にとどめ、まとめに入ろう。大正一二年の関東大震災直後、石川は『萬朝報』に「魂の復興」を書く。これは「東京には東京の自然があり、東京の伝統と社会的地位とがあ

る」という立場から「美」へと接近する、全編が、情況の激変に直面しての地理的環境論である。昭和七、八年頃、千歳村・共学社を根拠地にして発信する『ディナミック』の社会美学は、地方の誌友たち（彼等は知識人であつたが、それぞれの地域で驚くべき程各人が多様な生業に携わっていた）との交流の中で、地理的環境を常に念頭に置いた実践と理論から生み出されたものであった。また戦後昭和二年末に書かれたと推定されている「五十年後の日本」は、例えは武蔵野の小高い丘の一軒家の老人、フランス系安南人、雲南にいるフランスの人類学者、ヤルカンドの古文化研究者……等々、登場人物それぞれが地理的背景を明確に背負っている。実際にこの「五十年後の日本」は地理的環境論で書かれた物語として読めるのである。<sup>42</sup>

石川は「場所の力」に引き寄せられ、自らも引き寄せていく面がある。他面、それと相反する流浪の面がある。前者は彼の非常に強い祖国愛・郷土主義として現れる。それは石川が田中正造から受け継いだ共同性への志向、自治協同の側面である。後者は日常的、慣例的な共同性を突破し、「亡國の民」に目を離さない側面である。それは徹底的な個人主義・「自惚れ」に支えられたアナルシー（anarchie）を志向する。石川のこの双面性がモロッコ以後、一つの道を歩み始めた、と私は考える。それを地理的環境論への道と名づける。しかもそれはカツコ付きではない、内發的な学問と呼んでよい性質をもつものであった。

地理的環境は、自然を当然含むが、人々が日々暮らす場所である。そこでは共同性、政治を抜かすことは出来ない。だが、地理的な場所は、実体的、特殊的な空間である故に、教義・主義と同化できない、あるいはそれらに抵抗さえるものを常に孕んでいる。柳田の言葉でいう「にこにことして立止まる人」の存在がそれを示している。「理論は不明であつても……〔景観の美しさに〕好い印象を受ける」人々の存在である。これは地理的環境の持つ共同性、共通感覚、すなわち政治的な側面である。他方、地理的環境は、エリゼの『地人論』からも明

らかなように、食物、動物、虫、病気、掠奪、不条理な死……などから逃れられない。そして人々は常に、移動し、交易し、交わっていく。すなわち政治を越える。具体的な地名、実体的な自然災害は抽象の世界と異なる。政治が人間のものであるのに対して、地理的環境には非人間的な要素が含まれている。これは実体的な地理的環境が本質的に持っているもう一つのアナルシー、人間の制度を揺さぶる型崩しの側面である。ここには、シンボルではなく実体性に依拠する地理的環境論が国家をそして政治を越境せざるを得ない局面が露呈している。これは地理的環境論の可能性であり、同時に注意を払わねばならない問題点である（権力の不在が引き起こす人間的悲惨を二〇世紀を経てきた私たちは知っている。古典ギリシャ以来の、起源・統治の不在としてのアナルシーをめぐる政治的・道徳的問題を石川が誠実にとり組んでいたかどうかについての批判的考察はこの覚書では扱うことことができなかつた）。いざれにせよ、「無縁」も、アジールも、おそらく地理的環境なしにはリアルなものではなくなる。海、森、山、川、河原、湖、巨樹老木の存在なしには考えられない側面が人間社会にはある。大正一二年の「魂の復興」は、人間の文化が作り出す政治と、それとは異なる要素を常にもつてゐる地理的環境との、両者の接点での発言であった。

モロッコ以後の石川は、一方における彼自身の「場所の力」への受容（共同性への志向）と流浪（アナルシー）を、他方における現実の人間社会の共同性（政治と移動・交易（存在が孕むアナルシー））に対応させる形で、学問を紡ごうとした。石川が『非進化論と人生』を「この書を土民生活の殉道者田中正造翁の靈に捧ぐ」としたとき、それは形式的な献辞ではなかった。「貴方はみつちり学問しなさい」という田中の別れの言葉への返答である。田中との約束に石川は拘束されている。しかし、約束の果たしかたにおいて、それは石川固有の内発的なものであつた。すなわち田中との約束を内側から変容させた。

モロッコの石川の、後日談を一つ述べ加える」とによつてこの研究ノートを閉じよう。一九〇五年のエリゼ・ルクリュの死後、ブリュッセルの地理学研究所は甥のポール・ルクリュによって運営される。が、第一次世界大戦の勃発の中で、閉鎖される。戦争が終わり、大正二一年（一九二二年）に石川は、ブリュッセル新大学内のエリゼ・ルクリュの地理学研究所の図書全部を購入し、日本に送るため、再びヨーロッパに渡る。購入および輸送面での資金は石本恵吉が援助の手をさしのべた。この図書の内容についてポールは次のように述べている。

エリゼが活動していた一〇年間にブリュッセルで蒐集した地理学関連の図書は相当大規模なものになつてゐた。特筆すべきは、世界中の最も重要な「地理学」定期刊行物を含んでいたことである。しかもそれが非常によく整理されていた。目録は完全であった。評論・研究雑誌の論文は主題、著者、書名別にリストが出来ていた。地図は地域、尺度に応じて目録に収録されていた。一九〇五年〔エリゼが死んだ年〕から一九一四年〔第一次世界大戦の勃発〕の間に、この図書はさらに広範囲にわたるものへと成長を続けた。その成長は急速ということではなかつたが、目録の充実度は完全に保たれ、項目は四万以上を含むようになった。グラビヤ印刷物の重要なコレクションもあつた。この地理学の図書は、研究・仕事のための群を抜く環境を作り出していたが、新大学 Université Nouvelle の研究者以外で、それを利用する人の数は現実には極めてわずかであつた。そして、戦争が起つた。機能は完全に停止し、大学はその扉を開しなかつた。ブリュッセルのこの大学の有用性は完全な無の状態であつた。これを活用してくれる新しい組織を探して、いたときに、東京にエリゼ・ルクリュ地理学研究所 Institut de Géographie Élisée Reclus を開設することを望んでいる。一人の日本人の学識深い人物が見つかった。図書は荷造りされ、迅速に事は運んだ。図書を入れた箱は一九二三年

横浜の波止場に着いていた……地震と大火が、石本氏のこの雅量ある企画に終止符を打つた。<sup>43</sup>

このプロジェクトの立て役者はいうまでもなく石川三四郎である。そしてこの研究所を日本に設立して、人々、研究者が利用できるように公開する計画を立てていた。<sup>44</sup> 関東大震災によって深川の倉庫で灰燼に帰することになってしまったこの計画と石川について、私はかつて次のように述べたことがある。

エリゼ・ルクリュ地理学研究所を日本に開設するという企画への加担は、やや未分化の、しかし或る現実の形を取りつつあつた石川のまさにその時に重なつていたといえよう。たまたま石本恵吉というパトロンの登場があつたということもあつたが、この地理学研究所の存在は、その研究所が具体的な形で日本に存在するようになつたかどうかに係わらず、石川のその後の仕事と重なるべきはずのものであつたと私は想像している。だから「再度の渡欧」の賑わいは、石川の内側の充実化・昂揚と対応していたように思える。日本でのエリゼ・ルクリュ地理学研究所の設立は石川の思想の変容（深化）のすでに生まれつづあつた方向においては決定的に重要であった。しかし石川の思想の変容はルクリュの図書の購入交渉およびそのための渡欧がかつたとしても、生じていたよう<sup>45</sup>と思う。

パ・ソナルな形では石川はその後も、ルクリュ研究会を催し、『地人論』を翻訳するという形で、地理的環境論への道を歩み続けた。しかし関東大震災後の私たちの思想と学問についていうならば、地理学研究所が開設されていたら、という思いは残る。この地理学研究所が一九二〇年代に開設され、石川が構想していたように、自由

に利用でき、人類学、「土俗学」、宗教学、社会主義、アナキズムそして地理学、歴史学がぶつかり合う舞台を確保していたら、その後の私たちの社会科学は幾分異なった形をとつて、いた可能性はある。少なくとも、現実のものより一つだけ豊かな要素を持つた学問の世界を形成して、いたであろう。<sup>46</sup>しかし、こうした仮定法で終了しきらないところへと石川は歩み始めたというのがこのノートのテーマであった。「魂の復興」（大正一二年）を経て、「非進化論と人生」（大正一四年）と『東洋文化史百講』（昭和十年代）を彼は生み出した。彼の学問の性格は、近代に対峙する魂の復興という表現がそれを象徴している。近代への彼の距離の置き方は、当時もそしてその後も見えにくく、ものであつた。魂の復興には潮の干満、自転、公転<sup>（シタクヨン、レヴァンション）</sup>といった非人間的なリズムが含まれている。場所に係わる「土民生活」——それは石川においては自治協同と同じ意味である——と、非人間的な要素をもつ地理学とを、石川は魂の復興として据え直そうとしたことはまちがいない。六万冊におよぶ地理学関係の書籍が焼失した関東大震災の直後、彼の「魂の復興」が生まれる（『萬朝報』に震災の一ヶ月半後五回にわたって掲載）。この消滅と再生が後日談のもつてゐるもうひとつ意味である。

モロッコでの發意あるいは湧出は、たしかに「失敗作」（『古事記神話の新研究』）、「骨折り損」<sup>（ヒビ）</sup>（『地人論』第二巻、第三巻の翻訳、未刊）であったかもしれない。しかし石川の後半生を地理的環境論への道と捉え直してみると、その湧出は、山道の途中で山行者を元気づけてくれる泉のように、今も湧き続けている。

## 注

(1) これまでマラケシから中仏ドムへの帰還は次のように考えられてきた。「大正九年（一九二〇）、六月末、モロッコより飛行機で大西洋・スペインを経てフランスへ帰る」（北沢文武著『石川三四郎の生涯と思想』完結編、「年譜」、

三〇七頁、鳩の森書房、昭和五一年刊)。『石川三四郎集』(鶴見俊輔編、近代日本思想体系、筑摩書房、昭和五年刊)の年譜も同様である。これは石川著『古事記神話の新研究』「序」の次の二節によるものであろう。「その内に私共はアフリカを出發することとなつた。如何に手を盡しても便船を得ることが出来ないので、遂に飛行機で大西洋、西班牙を横断して佛國に帰ることとなつた。(『石川三四郎選集』第一巻、四頁、黑色戦線社。以下『選集』と略す場合は黒色戦線社版を指す)。これは飛行機だと墜落の危険があるので、原稿だけは残しておきたいと思い、パリにいる友人・椎名其二に原稿を送ったことを述べるための前書きである。

ところで、『石川三四郎著作集』第六巻(青土社、昭和五三年四月刊。以下『著作集』と略す場合は青土社版を指す)には、「遺言の思ひ出」という未発表原稿が載っている。その中に次のような数行がある。飛行機は満員であつたが、「幸にしてジブラルタル港に寄泊するイタリヤの石炭船が一室を貸してくれるといふので、それに飛び乗つた。石炭の粉煙でまづ黒になつてジブラルタルに上陸し、それから入江を横切つてアルゼジラスに行き、そこに一泊して翌朝汽車中の人となり、スペインを縦断して、さきに船出したボルドーに帰着した」(六八巻、五八頁)。先の北沢、鶴見の「年譜」が、飛行機での帰還をとつてゐるのは、後者の未発表原稿の含まれる第六巻刊行以前のものであるから、無理ないといえよう。その後今日まで二十数年間、この帰還の道筋は特別明確化されることはない。あるいはこの石川の二つの間の記述の矛盾を解く資料がなかつた。しかし、本庄市立図書館・石川三四郎文庫に保管されている石川三四郎による「モロッコからフランスの古巣へ」という二百字詰原稿用紙三枚の原稿から、石川の帰還は間違いない(後者であつたことが確定できる(原稿用紙のタイトルでは、「モロッコから」に線を引いて消してある)。これもこの原稿から研究者の注意が逸らされた(因かもしれない)。それによると具体的な帰りの道筋は次のようである。ボーレル・ルクリュは所用で一足先に帰つていたので、石川とルクリュ夫人で飛行場へ行く。ところが一箇月先まで予約済みであることを知り、カサブランカ港に引き返す。たまたまフランスへ向かうイタリアの石炭船があることを知り、乗船し、一夜明けて、ジブラルタル港に着く。対岸のアルゼジラスへモータボートで渡り、そこからマドリードまで二等の列車に乗る。車中で一夜を明かし、翌朝マドリードに到着。そこでフランス行きの列車に乗り換え、国境を越えビアリッツに着く。そしてボルドーに着くと、友人ファン・デル・フォー氏宅に一泊し、翌朝サルラ行きの列車に乗り、ドムによく到着する。

この原稿は、『著作集』第七巻「著作目録」には含まれていない。今後、モロッコからの帰還に関しては、年譜は修正が必要であろう。また、日本人から見た、スペインの一九二〇年の情況という点でも興味深い原稿である。なお、

この原稿をタイプに打ったものは、『木学舎だより——石川三四郎研究季刊個人誌』(一九二〇年四月刊)に全文掲載されている。必要な場合は、私(山口)の方へ連絡いただければ、コピーを郵送できる。

(2) 『選集』第一巻の「解題・古事記と石川三四郎」(大澤正道)、および北沢文武『石川三四郎の思想と生涯』完結編、前掲書、五二、五六頁だけである。

(3) この三篇は『選集』第七巻『一自由人の放浪記』(昭和四年版の復刻版)に収録されている。

(4) 一九一九年一二月二七日と一月七日の二通。一二月二七日の書簡はモロッコへ旅立つ直前であるから、モロッコかのものとなると正確には一通。『石川三四郎著作集』第七巻を見られたい。

(5) モロッコ滞在中の石川宛書簡は、本庄市立図書館・石川三四郎文庫に三通保管されている。①ドロシア・クレメント(一九二〇年一月一日)、②マルゲリット・ルクリュ夫人とは別の人であろうか。ドムの消印)(一九二〇年一月二二日)、③アントニア・ギリヨーム(一九二〇年三月一日)。モロッコでの住所は、Monsieur Ishikawa Chez Monsieur [Mine] Reclus Marakech Morocco である。当時はこれで十分届いたのであった。他に④エドワード・カーペンター

書簡(一九一九年一一月一七日)では、モロッコに行く直前の石川にカーペンターはモロッコに関して親切な助言をあたえている。さらにまた⑤ルクリュ夫人書簡(一九二〇年一二月二一日)では、彼女が息子ジャックと再びマラケシに行つたことが知らされている。この書簡は日本に帰国した直後の石川に届いたはずである。なお、①と④は『木学舎だより』第三号(一九二八年)に、手書きの書簡をタイプに打ち直し、訳文を添えて掲載してある。

(6) 昭和六(一九三一)年、毎月行はれたエリゼ・ルクリュ研究会については、『著作集』第七巻「石川三四郎年譜」を見られたい。毎回三十名前後の人々が集まっている。出席者の記帳は、石川三四郎文庫所蔵の「ノート」で見ることが出来る。

(7) 山田吉彦(きだみのる)『モロッコ』岩波新書(一九五一年刊)、四方田大彦「モロッコ流謫」『新潮』一九九九年四月、七月号連載。

(8) 『自叙伝』は『著作集』第八巻を見られたい。論文としては次のものを参照されたい。米原謙「第一次世界大戦と

石川三四郎——「命アナキストの思想的軌跡」『阪大法学』、第四六卷第二号。同「ブリュッセルの石川三四郎」『書斎の窓』四六七、四七〇号。同「命時代の石川三四郎——その周辺——」『阪大法学』第四八卷第三号。また山口晃「齟齬・共同性・身体」『木学舎だより』第一、五号。

(9)

石川三四郎「生活態度の革命」『アーラン』第三号、昭和二六年。『著作集』第四卷に収録、三〇六、七頁。

(10)

大澤正道「石川三四郎」リプロポート、三七頁。

(11)

望月百合子（書き書き）「『ディナミック』を出していた頃」『木学舎だより』第二号（一九九八年）、八頁。

(12)

唐沢隆三（書き書き）「兄・憲一のこと、石川三四郎先生の自費出版のこと」『木学舎だより』第四号（一九九年）、三三一、三四頁。ところで、白井吉見『安曇野』（五部作）の主要登場人物の一人は石川三四郎である。その中で地方の講演の後、石川が薪割りをする場面があるが、その情報資料提供者は唐沢隆三氏である。

(13)

生まれもほぼ同時期であり、同じく本郷教会で活動し、ヨーロッパでの生活も相前後した吉野作造と比較するとき、私たちは日本の社会思想家の二つの豊かな外國経験に触ることが出来る。『吉野作造選集』岩波書店、第一三卷「日記一・明治四〇年（大正二年）および同巻の興味深い解説を見られたい。

(14) 日本に帰国直後、石川はドムについて「此地に於ける五年間の生活は私の生涯中で最も意義ある、最も幸福なるものであつたと思ふ」（『自由人の放浪記』『選集』第七卷、一六頁）と述べている。明治三九年頃から逃亡まで、そして逃亡中も続いたであろう、石川の心と体の「病」が癒されるためには、ドムという場所が彼には必要であったといえよう。

しかし同時に、さすらい・流浪への想いが、同時代の一部の人々と共有されるものとして、石川の中にかなり以前からあつたことも事実である。この点はこれから考察するモロッコの印象にも関係してくるので、明治四五年の「人語」を見てみよう。

然れども流浪必ずしも放浪に非ず。蓋し我の流浪は是れ天我の示現であるが故に、運命の児なる我も其本能の愛と義とに於て天華を開くものなるが故に。されば唯「天我をして自ら示現せしめよ」是れ吾人の運命にして、同時に吾人の正義である。（『著作集』第一巻、四九八頁）初期社会主義的主要メンバーの一人であつた石川においては、このような形で、すなわち観念と情緒が未分化のま

ま絡まり合う形で、流浪と義が結びついている。それは『三十三年の夢』の宮崎滔天、一時期アメリカで活動した赤羽巖穴といった石川の周囲の人々が、近代に入つてからも江戸時代から受け継いだ「義」と「さすらい」であつたとみてよいであろう。この点は石川の場合昭和になつてからも変わらず、むしろ「流人語」の行間にあつた諦観の要素が薄れる。義と流浪の絡まりを昭和四年には次のように表現する。

到る處に青山があり、到る處に故郷ができるのであるが、それと同じく到る處に貧乏があり、到る處に苦闘がある。到る處に故郷が造られる為に到る處に苦闘が体験される。

放浪もまた戦ひだ。建設の戦争だ。自由人の放浪記は此世界的故郷建設戦の一記録に過ぎない。(『選集』第七巻、

### 三、四頁)

(15)

石川三四郎『自由人の放浪記』『選集』第七巻、六七五頁。以下本文中引用下の( )内は同書の頁数。

(16)

石川三四郎宛宮崎滔天書簡二通(一通は宮崎龍介との連名)が石川三四郎文庫に保管されている。石川は帰国後『古事記神話の新研究』が出版されるるとすぐに、それを滔天に送つたことが書簡より分かる。この書簡二通は平凡社版『宮崎滔天全集』には未収録。『木学舎だより』第三号を参照されたい。宮崎滔天・龍介の石川宛書簡は、「コスマ俱楽部小史」「京都橘女子大学研究紀要』第二六号(1900年3月)を見られたい。

(17)

石川三四郎の伝記では「爆弾の少女」として知られている未遂事件である。石川の中国の友人鄭毓秀女史が袁世凱によつて処刑されたというニュースから、石川、ゴベール、中国の青年達が袁世凱に復讐を企てる。従来この間の事情については石川の自伝が専ら唯一の資料であった。信憑性に問題があつた。北沢、前掲書でこの事件に触れていいのはそのためであろう。今回、石川三四郎文庫に保管されている華林の書簡解説を私は中国人の方の援助を受けて行ってみた。その結果、この復讐の企ての日時、当時の中国人青年の心情、態度がこの書簡から分かる。華林(Houa Lin)は石川の自伝で「中國の友人H君」となつてゐる人物である。これまで『著作集』の年譜ではこの事件は八月頃と推定されていたが、今後は、この事件は六月六日から七月七日の間と修正されよう。『木学舎だより』第五号(1900年)を見られたい(中国語書簡原文は第六号に掲載する予定である)。

(18)

石川三四郎「國民の偉業」大正三年『著作集』第六巻に収録。

(19) 石川三四郎「チエルケソフを憶ふ」大正一四年『著作集』第六卷、二四八、二四九頁。  
(20) 『萬朝報』での掲載は次の如くである。『新興文明』大正八（一九一九）年二月二十四日、三月一日、「國際聯盟」同  
三月五日、六日、「新歐列國」同三月二八日、四月三日。

(21) エリゼ・ルクリュ著・石川三四郎訳『地人論』（『選集』第六卷）一頁。

(22) 鈴木貞美編『大正生命主義と現代』（河出書房新社、一九九五年刊）の詳細な「年表ノート」に石川三四郎が触れられていないのはその故であろう。今ここでは示唆的に述べる余裕しかないが、大正時代の「生命主義」と対比したとき、石川の生命・原始には「魂の復興」すなわち彼の生涯の脈絡での「学問」が頗著である。石川の制御された露に表現しない姿勢（すなわち、その成果である『東洋文化史百講』）に即していうならば、それは「宗教学」に近いものである。

(23) 石川三四郎『古事記神話の新研究』三徳社（大正一〇年刊）一八七、八頁。なお『石川三四郎選集』第一巻は『古事記神話の新研究』ジープ社（昭和二五年）の復刻版なので「ロアジ教授の意見」は収録されていない。

(24) 同右  
二〇〇頁。

(25) 石川三四郎は昭和二五年刊行の『古事記神話の新研究』（十二版）まで、繰り返し推敲、修正を重ねた。ところでは、私は確認した限りでは、第五版までは収録してあった「ロアジ教授の意見」を彼はそれ以降の版では削除している。これは疑問点として残る。

また「[石川は]帰国した時すぐに、『古事記神話の新研究』と題してその研究をまとめた著書を世に送り出したが、『石川三四郎は、塔に立てこもりわれのみ正し、とする学者達は、ひそかにその本を買って読み、そのイデーを盗みながら表面は笑殺の態度をとつた』（望月百合子『ディナミック発行のあとさき』復刻版『ディナミック』黒色戦線社、二五〇頁）という風潮が現実にあつたとしても、それは石川の仮説の検証とはまた別問題である。

むしろこの本に關しては友人椎名其二の当時の感想の方が、學問的な価値については直感的に鋭い判断であったようと思える。「石川氏は決して悪い人間ではないが、どうも新聞記者式だ、その学識は殆どゼロ、その手腕も同様、アノ人は今日本文明起源に関する一小冊子を出版する由だが、俺はよくそれを知つてゐる笑止して可なり」（一九二一年三月二九日、堀井金太郎死書簡）嵯川讓『パリに死す』——評伝・椎名其二 藤原書店、一六八頁。

(26) 石川三四郎「社会分業論」昭和六年『著作集』第三巻、一六六～七頁。

(27) Edward Carpenter, *Pagan and Christian Creeds: Their Origin and Meaning* Harcourt, Brace and Howe, 1920, pp. 27-

28. 「サムノン」の例も、「民衆の悲哀（恐怖）」の説明も同一である。石川三四郎文庫に保管されている同書は、カーペンターから石川に贈られたものであり、カーペンターの次のようなサインが記されている。“Sanshiro Ishikawa from his friend Edward Carpenter 2 Sept. 1920” “ルソーに訪ねて、二度目の出会いの時である。同書には線が隨所に引かれ、石川が精読したことが分かる。このpp. 27-28も線が引かれている。

(28) *Ibid.* p. 12.

(29) カーペンターに関しては都築忠七『エドワード・カーペンター伝—人類連帶の予言者—』晶文社（一九八五年）を、

ルクリュ夫人に関して『一自由人の放浪記』一二頁を見られたい。

(30) 石川三四郎『東洋文化史百講』第一巻（『選集』第一巻に収録）五九頁。

(31) 同右、一八〇頁。

(32) 四方田犬彦「モロッコ流謫」『新潮』一九九九年六月号の次の一節は、モロッコでの日本人の自己認識として興味深い。それはアフリカ人ととの会話の中で生じたものであった。

彼は日本人がみずからオリエントと呼ぶことに、正直いって驚きを感じてしまうといつてはいた。ではマグレブ〔チュニジア、アルジェリア、モロッコなどアフリカ北西部諸地方の総称－引用者〕から見ると日本は同じオリエントではないのかと尋ねると、日本はオクシデンツを越えた、さらに向こう側だと、大きく手を振って答えてくれたことを思い出す。……地政論的に見て、この二つの言葉がどこまでも地中海を鏡面として対照的に成立しているという認識があつたようと思われる。オクシデンツとオリエントは、互いに自己同一性を確認しあうために相手を必要としている、対になつた存在であるかのようだ。（二五八頁）

(33) 『古事記神話の新研究』（大正一〇年版）前掲書、一一一頁。

(34) 石川の多元論については、彼は『ディナミック』創刊号で「多元論」という文章を書いている。さらに『ディナミック』第四〇号の紙面はほとんどが「歴史現象の多元性」にあてられていて、

(35) カーペンターへの最後の訪問については『自叙伝』『著作集』第八巻、四〇一頁を見られたい。なお、『古事記神話

の新研究』「第九章 岩屋戸会議の神話学的研究」で石川はカーベンター著『異教とキリスト教教義』を援用している。

(36)

石川三四郎 「カアペントアを想ふ」『ディナミック』第八号（昭和九年六月）。

(37)

石川三四郎『自叙伝』、『著作集』第八巻、二七八頁。

(38)

『東洋文化史百講』第一巻、三四〇頁。

(39)

『東洋文化史百講』「第九四講 日本のルネサンス」の結論の中で、「日本に対するオランダは、西洋に対するアラブでありました」と述べてある。『選集』第三巻、二二六二頁。

(40)

鶴見和子「土着文化の普遍化への道」『鶴見和子曼陀羅IV』前掲書、二六四頁。

(41)

鶴見和子「漂泊と定住と」『鶴見和子曼陀羅IV』藤原書店、五八頁。

(42)

石川三四郎「五十年後の日本」『著作集』第四巻に収録。最後の老人の言葉がこの物語全体を示している。

じうぢやな諸君、気候は厳酷ぢやが、只だ大自然の営みが此の小島〔日本〕に纏まつてゐると  
いふが些か面白いのぢや。戦争を放棄し、武備を全廃した日本が、かうして大自然の純粹な創造の芸術に参加する  
じぶが出来るのも、全く地理的環境の賜ものぢや。(一一七頁)

(43) Paul Reclus, "A Few Recollections Else and Elise Reclus", Joseph Ishill, compiler, editor, and printer. *Elise and Else Reclus: In Memoriam*. Berkeley Heights, New Jersey : The Oriole Press, 1927. pp. 16-7.

(44) 石川三四郎文庫には「ルクリウ文庫は近く公開される／横浜税関に拘留されて、いたが最近引渡さる」という見出しの付いた、新聞切り抜き（大正一一年一〇月初旬のものであろう）が保存されている。「……石川氏の帰朝を待つて

同氏の意見通りに公開される筈である。右につきて石本男〔爵〕は「ルクリウ文庫は公開して一般の人に見せる考へで居ます。その方法は石川さんの意見を聞いてからにしようと思つて石川さんの帰りを待つてゐるのです」と語つた。」

(45) 山口晃「齟齬・共同性・身体（二）」『木学舎だより』第二号、一四七頁。

(46) 石川帰国直後、すなわち地理学研究所開設の構想のわざか前に、吉野作造から石川三四郎へ一通の手紙が届く  
(石川三四郎文庫所蔵『木学舎だより』第二号、七〇頁)。

前略　此間の歓迎会には是非出たいと堺君まで頼んで置き乍旅行中だったので失礼いたしました。其中二、三の友人と一所に腹蔵なき御懇談を承る機会を作りたいと考へてゐますが、御思召は如何でせうか。御都合のいい時間に御宅に伺ひましてもよろしくぞいりますが、場合によつては御足労を願つてもよろしく存じます。

取急ぎ御願ひ旁申上げます。

〔大正九年〕十一月十七日

吉野作造

一九二〇年代、日本の思想界は、いくつかの豊かな水脈、地下水脈が交流していた。またその可能性もあつた。石川三四郎の地理的環境論への道もその一つである。

付記　一九九九年初夏、東急文化村の井上俊子氏から、パリのアラブ世界研究所 Institut du Monde Arabe 主催の国際モロッコ年関連企画展「モロッコへの誘い」L'appel du Marocのために、本庄市立図書館・石川三四郎文庫に石川のモロッコ関係の資料の問い合わせがあつた。井上氏との数回にわたる会話の中から、本稿の構想は生まれた。翌年の三月に草稿ができ、「思想史の会」で報告する機会を得、その後飯田泰三氏から草稿に対して貴重なコメントを頂いた。お二人に心から感謝いたします。

(やまぐち　あきら　駒沢大学講師)